資料館ノート　第82号　　平成22年11月16日発行

江戸庶民の旅と江東②

富士信仰と富士塚

江東区深川江戸資料館

1．富士山への信仰

富士山を信仰し登山する行事は、室町時代から始まったとされています。「富士山に参拝すると災難から免れる」という考えから、関東地方を中心に庶民の間で流行しました。

江戸中期の享保18年（1733）、天災による米不足、社会不安などへの幕政批判をこめて、富士登山の大行者（だいぎょうじゃ）、食行身禄（じきぎょうみろく）（本名伊藤伊兵衛）が富士山7合5勺目の烏帽子岩（えぼしいわ）で、断食入定（だんじきにゅうじょう）（食を断って亡くなること）するという事件がありました。以後身禄の弟子が、富士信仰を基本とする実践道徳を普及させるため、講が組織され、寛政年間（1789～1800）の頃には「江戸八百八講」と呼ばれるまでに拡大しました。

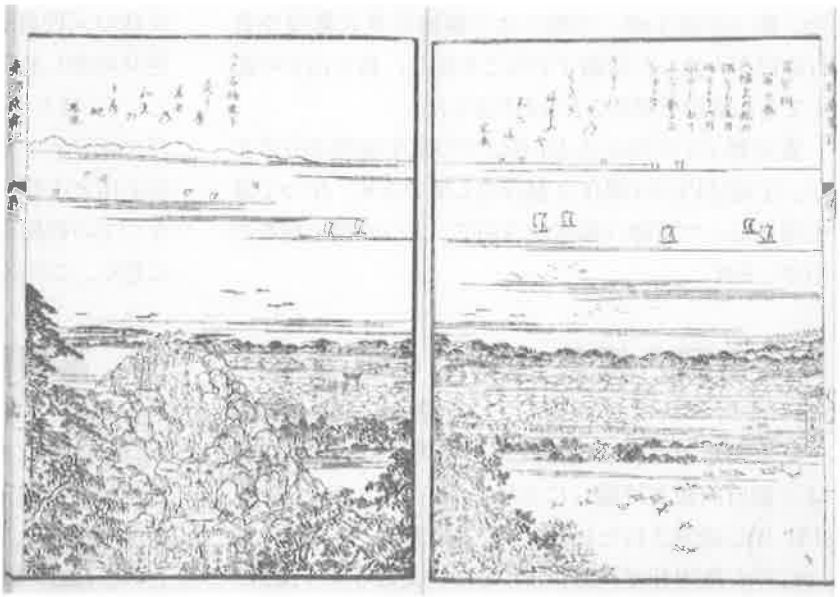

図1　富岡八幡宮富士塚。『東都歳事記』（天保9年　1838）館蔵。富士塚の頂上からは江戸湾を望むこともできたようです。

2．山開き・富士塚・講組織

旧暦6月1日～7月末が富士山山開きのシーズンで、江戸からも講を組織して大勢の人が参拝しました。講は富士信仰について指導し、焚き上げなどの祭事を行なう先達（せんだつ）、先達を補佐して講の集金や支出を担当する講元（こうもと）、講と講員の連絡をする世話人が中心メンバーで、5年くらいを1期とし、登山費用など講にかかる経費を月賦で集め、全講員の5分の1ずつを登山させていきました。毎月「月拝み」と呼ばれる集まりがあり、先達と講員が話し合ったり、先達に相談事をしたりする場が設けられていました。

江戸からの行程は、市中から甲州道中で四谷大木戸を出て八王子、高尾山薬王院を参拝、さらに小仏峠から大月へ向かい、富士街道を富士吉田へ出て、そこに80軒ほどもあったという御師（おし）の屋敷に到着し旅装を解きます。

御師は参詣の案内や宿泊の世話等をする人で、布教活動に大きく貢献しました。講の人々は御師のもとで先達の免許や行者としての名前の授与を受けます。そして富士山に登り山中の石室で1泊して山頂へ向かいます。帰りは須走口（すばしりぐち）から箱根足柄峠に出て、大山阿夫利（あふり）神社に参詣し、伊勢原・藤沢を経て品川から江戸へと戻りました。出発から8日間ほどの旅です。

登山の装束は笠・行衣（ぎょうえ）（白装束）・金剛杖で、鈴を携えて、ご詠歌を唱えながら登り、山中の各所で行衣の肩や前身頃に朱印をいただき、杖には焼印を捺してもらいます。老人やこどもの参加は困難で、女人禁制でもありました。

図2　「最晩年」の富士塚。昭和30年(1955)頃。江東区教育委員会蔵。富岡八幡宮社殿裏手。裏の建物は数矢小学校。

江戸ではあまりの流行に、富士講行者と称して江戸市中を徘徊（はいかい）し、悪事を働く者まで現れました。幕府

は加持祈祷や行衣を着て江戸市中を巡回することを禁じ、富士山信仰の母体でもある富士講そのものを禁止する触れまで出しました。それでも富士信仰は止むことがなく、明治維新後には復活しました。

しかし、富士山へ行くことは容易でないことから江戸にいながらにして信仰を深めるために、江戸市中には富士山のミニチュア版として富士塚が造営されました。頂上には小祠、中腹には小御嶽石尊大権現や食行身禄が入定した烏帽子岩などを配し、富士山から運んできた溶岩を積むこともありました。

東京都23区内には40基ほどの富士塚がありますが、江東区内には現在2基存在しています。かつて富士塚があった富岡八幡宮を含めて、3つの富士塚をご紹介します。

3. 富岡八幡宮（富岡1）の富士塚

（表面　図1、図2）

寛永元年(1624)に創建された富岡八幡宮の富士塚は、『御府内備考続編』によれば、享保7、8年（1722、23）頃に造営されたと伝えられています。最初頂上には石尊大権現社が祀られましたが、文政3年（1820）浅間神社が勧請されると、富士塚とよばれるようになりました。規模は高さ2丈(6m)、周囲50間(90m)。昭和30年頃（1955）まで社殿裏手にありました。

図3　浅間神社富士塚。平成8年（1996）頃。江東区教育委員会蔵。社殿が塚の上にあった時代です。

4. 浅間神社（亀戸9）の富士塚

（図3）

戦国時代の大永7年（1527）創建と伝えられる浅間神社境内にある富士塚は、江戸の年中行事を詳しく解説した『東都歳事記』（天保9年・1838）にも「本所六ツ目　亀戸普門院持」として記されています。普門院は亀戸3丁目にある寺院ですが、かつてはこの浅間神社を管理する寺でした。ここの富士塚は、寛文年間(1661～72)の造営と伝えられ、平成8年(1996)の発掘調査の際、塚の規模は高さ3m、直径20mだったことが分かりました。現在は周辺の都市開発の際に富士塚の上から社殿が移築されています。

神社の境内には享和元年（1801）に建立された「富士せんげん道道標」が残されています。もとは竪川東端の元佐倉道（旧千葉街道）が旧中川にさしかかる逆井の渡しあたりに立っており、碑上部に「是より右」として「富士せんげん（浅間神社）、亀戸天神、六阿ミだ（常光寺）、あさくさ（浅草）」と記しています。亀戸の名所と浅草への道（北十間川沿い）をさしています。かつての幹線道路でもあった元佐倉道（旧千葉街道）に近く、この富士塚を訪れた人も多かったのでしょう。

5. 冨賀岡八幡宮（南砂7）富士塚

（図4）

江戸初期に開発された砂村新田の総鎮守、冨賀岡八幡宮は通称元八幡といいます。富士塚の造営年代は不明ですが、富士講の「山吉講」の人々によって建立されました。塚の中腹にある小御嶽神社の小祠は天保4年（1833）の奉納で、江戸周辺に富士塚が多く作られた時期と同時期に造られたと考えられます。

規模は高さ5m、直径10mです。塚全体に小祠や登山を記念した奉納碑が見られ、その形状をよく残しています。境内での移設が検討されています。

富士山は古代から現代まで人々に愛されてきた名山です。かつては江戸から富士山がよく眺められたことも信仰の対象となった理由のひとつでしょう。その場所へ行ってみたいという願望は、かえって富士塚に参拝することで、一層深められたのかもしれません。

図4　冨賀岡八幡宮富士塚。平成22年10月現在のようすです。